

日本女子大学

Cognitive Gerontology 研究会編

『老年認知心理学への招待』

河原 直人

本格的な高齢社会を迎えて、今の社会に提起されている高齢者の様々な問題を考える時、まず高齢者が有する様々な特性についての多面的な理解が必要となる。特に、高齢期の諸問題にアプローチする場合、如何なる場合においても、当事者の自尊心を第一義に捉えるべきであることは勿論のこと、その人生の可能性が最大限に世代的協働によって支援されることが求められる。

人間の最大の可能性が人生の最後の最後まで存在するならば、人間にとって「老い」とは、それまでの人生で培ってきた様々な知識、教養、経験、価値などから、最大の可能性を引き出す時期とも捉えることができる。この時期の人間の状態を見つめ、その特性を活かしていく

ことで、やがて訪れる最期の時まで、生きる意義を実感し続けることが出来れば、それは人間ゆえの素晴らしい人生といえるだろう。

この人生の素晴らしさを感じながら各人が高齢期を過ごすために、異業種がマルチ・ディシプリナリーに集い、互いに触発されながら研鑽を続けていく作業が今後ますます重要となってくるというまでもない。その上で、医療や介護のチームワークが研究の場面だけではなく、実践の現場でも要請されることになる。

本書は、こうした老年期の研究と実践のあり方について、心理学、及び、その関連領域の研究と実践の第一線で活躍される気鋭の研究者たちが、それぞれの立場から科学的アプローチを試み、そこから得られる知見をもつて広く社会に訴える良書といえよう。

第一章では、高齢者の自尊心を手がかりに対人処理と対物処理の関係が分かりやすく述べられ、その生活圏縮小の問題においてもモチベーション喚起の行動工学的な工夫の重要性について言及されている。こうした老年科学の背景にある諸問題から整理された総説は、私のかねてよりの科学的アプローチに対する遅疑逡巡に一筋の光明を与えてくれるものであった。

第二章の認知症患者の自伝的記憶を手がかりとして、

認知機能にアプローチする手法は、介護のあり方を考える上で示唆に富むものである。また、第三章の老人性痴呆疾患治療病棟における回想法実施と効果について、そのテーマ選定そのものと刺激材料に着眼した検討、第四章の生理心理学と臨床心理学との協同実験の試みによる健常高齢者に対する回想法の有効性についての検討も、高齢者に内在する能力を理解するうえで重要な点が多い。

一般に、高齢者はライフサイクルの最終段階（高齢期）にあり、社会や文化、生活習慣などの影響を受けて個人差が大きいといわれるが、高齢者は身体・心理・社会的な統合体として、内部・外部環境の変化に影響されやすく、適応するのに困難を生じやすいと私は考えてきた。その一方で、こうした社会関係のなかで長い時間をかけて醸成された高齢者の価値観の問題を考える際、私は、過去の人生の時間において培ってきた意識が、現在における環境の諸要因をも統合して、一連の価値観となりゆく過程の可変性に関心を抱いていた。特に、家族や社会からの疎外感を強く意識するとともに、社会的役割を遂行できない現実との葛藤が生じる問題は、他の学問領域でも、しばしば推察されてきたことであった。しかし、これらの章で報告されている回想法の報告は、まさに高齢者と周囲が協働して、今の自分自身のあり方につ

きまとう不明瞭さを解き明かし、前向きな共生の手がかりを与えてくれるように私には思われた。

第五章の高齢者における音楽聴取および歌唱時による前頭野の活性化についての調査報告は、「懐かしむ」重要性——そして、残存する感覚機能で音楽の最も基本的な要素であるリズムを感じ、身体を動かすことで運動機能を維持、改善することにもつながることが分かり、感銘を受けるものであった。とりわけ、高齢期の介護の場面では、当事者の主体性が少しでも見出される場合、その当事者の残存能力を陶冶して、その長所を積極的に引き出していく姿勢が肝要であるように思われる。こうした調査報告は、昨今耳にする「主体放棄の依存」のみを助長する介護体制の悪循環からの脱却を考える際、非常に重要な視点を含むものである。

第六章の高齢者の言語能力に焦点を当てて脳活性化課題を検討した結果報告は、高齢期の認知能力の維持や認知症の防止と予防、言語能力の回復のための有効な方策を提起している。本書籍刊行のきっかけとなったプロジェクト名が「Cognitive Gerontology」に基づく高齢者の高次脳機能の開発」ということもあって、脳血流量変化からみた大脳皮質の機能局在性の考察に接して、まさに、脳科学の新しい知見を垣間見た思いであると同時に、介護福祉の諸問題の考察にも、今後大いに参照され

うるものではないだろうか。また、第七章の文法能力について新たに開発された心理検査法 (J. COSS) による分析・検討の報告は、認知症の診断基準について改めて考えさせられる論考で、次世代の実践の場面で活用されることが期待される試みである。

第八章と第九章の高齢ザル研究の現場からの報告は、それらの研究デザインや分析手法、詳細な考察も興味深かったが、前者では「人間関係を含めた環境要因の重要性」の指摘、後者では「ヒトの脳の構造がどのように変化していくとも、日常の行動こそが重要」という論点ややはり印象深かった。以前、生命倫理の研究者として高齢者の諸制度を研究している際、高齢者の身体面以外に関する事象が、正しく周囲から客観化されない時、あるいは、その客観化のもととなる外的な環境そのものに、当事者の主観を無視するような指標がある時、高齢者自身に内在する自己概念が不自然に変容してしまうことを懸念する場面がしばしばあった。また、身体状態の変化に伴う、周囲からの半ば強制的な生活の制約や、それに伴って変容する人間関係の不均衡などによって、高齢者自らの価値判断力に脆弱性が生じてしまう場合、主体的な意思が不明瞭となり、本来あるべき周囲との関係性が見過ごされてしまうことも私はおそれていた。しかし、本書の高齢ザル研究で報告される内容は、その明快

な科学的分析と適切な事例紹介によって、一筋の光明を与えてくれた。

第一〇章の高齢者における知覚の基礎機能、感情・情動の脳内機構、感情の視覚的表出と認知についての考察、さらに、脳疾患者の研究結果との比較考察は、高齢者の情動認知の特性について示唆に富むものである。一般に、高齢者になれば、その視力や聴力、体力のみならず、記憶力や見当識、理解力や言語能力等、人間関係を築く上で大切な能力が衰えると考えられがちである。しかし、恐怖心、喜び、自尊心、苦悩、不安、羞恥心、思いやりといった経験的に獲得した情緒的能力やその表出、事象に対して関心を寄せるという一種の社会性が、周囲に正しく理解されず、活かされないことこそ、問題があるのかもしれないと私は考えていた。本章で指摘される高齢者特性の理解の手立ての可能性は、これからの高齢社会の各場面で参照され、役立てられるべきであるように思う。

第二部の実践編では、第一章に集中力、援助行動、自尊心を手がかりに、認知症高齢者に対する回想法の実際が詳細に述べられ、現場で役立てられる事柄が多く述べられている。第二章では、自然の素材に着眼して、老人病院入院患者との日常的な関わり方の具体的な方法と課題が述べられている。第三章では、上述の J. COSS の

現場での使い方と留意点が詳述され、第四章では、高齢者の音楽療法の実践が体系的に述べられている。

以上、本書は、研究編・実践編ともに、心理学領域以外の研究者にとって学ぶべき点が非常に多い。高齢者に内在する能力とその活用のあり方について、周囲との関係性の中で考えることは、心理学以外の分野においても重要な論点である。たとえば、「日常生活遂行上の機能は最大可能な範囲に保たれているか」、「心理的・情緒的に安定しているか」、「心身のストレス状態にある個人にフィードバックや自己確認の機会を与える支援がなされているか」、そして、「高齢者本人にも何らかの社会的役割があるか」、さらには、「現在の自分の状態に満足感を抱いているか」、などである。こうした問いかけに解答を与えうるエッセンスが、本書には、見事に詳述されている。

但し、私たちは本書の内容を知るだけで満足してはならない。高齢者の諸問題へのアプローチで最も留意されるべきは、それが始まる前からの当事者自身の側からの意識のありようとも捉えられるからである。ケアをめぐる社会的ニーズは、今後いつそう複雑になり、増加の一途をたどるかもしれない。それに適切に対応していくためには、「老年認知心理学」ならではの多様なバックグ

ラウンドの研究者による協働作業をさらに展開させていく態度が重要である。そして、そこから得られる一つの知見から、今後もお、不確実な現場の要請に耐える方法論を蓄積してゆく必要があるだろう。